

平成19年度野幌プロジェクトフォローアップ委員会議事概要

1 日時 平成20年3月25日(火) 14:30～16:40

2 会場 北海道開拓記念館(講堂)

3 出席者

(1) 委員 五十嵐(恒)、五十嵐(敏)、岡崎、荻野、角館、工藤、佐藤、高橋、谷、橋場、
宮本、村野 (敬称略、五十音順)

(2) 北海道森林管理局 花岡(計画部長)、坂田(企画官)、荻原(石狩地域森林環境保全
ふれあいセンター所長)、小合(石狩森林管理署長)ほか

4 議事概要

事務局による挨拶、委員長挨拶、事務局による資料説明の後、五十嵐(恒)委員長の進行の下、以下の議論が行われた。

(1) 討議

【森づくり参加者等とのコミュニケーションの充実について】

委員：野幌森林再生連絡会の際に出された参加者の意見等を紹介してほしい。

事務局：連絡会では、ハチ対策などのノウハウを教えてほしい、自然林を再生させるべき場所に自生種ではない庭木を勝手に植えられてしまったがどう対応すべきか、イヌを森林公園に入れる人が多いが対策はないか、苗木づくりのための種子を国有林の樹木から採取したい、といった要望・質問や、植栽木調査を小学生も含めて実施して有意義だった、モニタリング調査方針にある方法では手間がかかるので簡略化して実施したといった感想などがあつた。

委員：その庭木はムクゲだったと思ったが、野幌プロジェクトは自生のものに限るという方針があるわけだから、各方面にしっかり指導・啓発してほしい。

委員：野幌にムクゲを植えるといったすべきでないことを皆知る必要がある。そのためにも「みんなで森林づくり」であれば、参加者の目的意識や関心、参加後の感想などについて把握をしたほうがよい。「野幌森林づくり塾」の場合は、参加して良かったと思っているからこそリピーターが増えていると思うが、これについても参加者の意識を把握したほうがよい。このことは、今後の活動方向を決める上で生きてくるし、公園利用者に何を知らせるべきか考える上でも役に立ってくる。連絡会には私も参加したが、ふれあいセンターや参加団体の皆さんが頑張っていることを初めて知り、私自身も意識が変わったような気がした。このような機会を設けることにより、多くの人にいろいろな情報を知らせていく活動を積極的に進めてほしい。

事務局：意向把握のための調査は実施したことはないが、「野幌森林づくり塾」については、参加者数を限っていることもあり、参加者との会話などを通じて参加動機や要望といったものがかなり把握可能であり、それをプログラム作りに生かしている。特に、塾生の場合には、作業を体験するだけでなく、もっと深く野幌の森や我々国有林管理当局と関わりを持ちたいと考えていること

は間違いないことから、刈り残すべき天然稚樹に印をつける作業を取り入れたり、クマガラ調査に誘ったりして、今年度はこれまでよりも踏み込んだことをいくつか行った。とはいえ、今後はこれまで以上に参加者や市民の意見を把握していかなければならないだろうと思っている。

委員：一般の方々に教える役割を持つ我々のような者や学生さんなど、一般の人と専門家との中間的な立場の者に対する講習会やモニタリング結果をフィードバックする機会などを設けることにも積極的に取り組んでほしい。

【森づくりを進めるための技術的課題について】

委員：植栽実績には樹種不明があるが、そのままにしておくのか。

事務局：特定の1団体のものであることから、まずは樹種をはっきりさせたい。

委員：ふれあいセンターは頑張っているという印象をもった。ただ、今回の植栽結果を見ると、シナノキが非常に少ない一方、ケヤマハンノキが多すぎるとも思える結果だ。目標とする森林の樹種構成についてもっと具体的なイメージを持って参加団体を指導したほうがよい。

事務局：この委員会の前身である野幌森林再生検討会において、昔の野幌は現在よりもかなりトドマツが多い林相だったという指摘があった。このため、参加団体に対してはトドマツと広葉樹の混植を指導したり、具体的にアドバイスを求めてきた団体にはトドマツと広葉樹の比率を半々にといった指導をしてきた。ただ、数多い広葉樹樹種のうちどれをメインとすべきかとなると、ヤチダモなどが候補とは思いますが現時点でははっきりさせていない。

委員：関連することであるが、木材生産を主体にした森づくりの場合には下刈りをするので植栽木を早く大きくさせるが、このプロジェクトは多様な森をつくるのが目標。そのために天然稚樹を活用することが大事であり、下刈りの際の注意が必要である。4割をトドマツが占めるという植栽結果だが、一斉林にしてしまうと地下水位が高いこともあり、台風の際にまた倒れかねない。そうならないように、例えば坪刈りをするとか、ササや大型草本があるところに限って行うなど下刈りに関する考え方を整理し、参加団体に指導していく必要がある。下刈りをあまりしない参加団体があるとの事務局説明があったが、理由を把握しているか。

委員：野幌には湿地のようなところが多いことから、私の団体ではヤチダモやケヤマハンノキを場所を選びながら植えてきた。また、ホオノキ、ヤマグワ、ハリギリなどの天然更新が多いので、あわせて育てていくために下刈りの前に竹串で目印をつけ、刈らないようにしている。一年目に植えた箇所では、植栽木1700本に対し、天然稚樹500本に印をつけた。

事務局：「みんなで森林づくり」箇所では我々が天然稚樹に印をつけることによりできるだけ刈らないようにしているし、「野幌森づくり塾」では今年度から、プログラムのひとつとして、残したい天然稚樹に印をつけてもらった上で下刈りをさせるということも開始した。ただ、これだけたくさんの種類を混ぜて植えたところがどのように推移していくか、我々も経験が少ない。なお、下刈りをあまりしない参加団体は1団体のみであり、深い考えがあるのではなく、下刈りに対する関心が低いと見ている。

委員：天然稚樹を生かすことはとても大事なことであり、そのためにも、かつての

森がどういう樹種構成だったのかというイメージを持っておいてほしい。
支障木懸念から伐採を見合わせたニセアカシアがあるようだが、巻き枯らしは考えられないか。

事務局：巻き枯らしによる枯れ木は公園利用者にとって危険となることと、このような枯れ木はいずれ伐採しなければならなくなるが活着している木よりも伐採作業が難しくなってしまうことから、巻き枯らしは見送った。これらをどうするかは、今回の伐採後の状況なども見ながら考えていきたい。

委員：下刈りについては、ケースバイケースと思うが、その中で天然稚樹を刈らないようにすることもあっていい。さらに言えば、生物多様性全体を考えた森林再生を行うのがこのプロジェクトであるから、木だけでなく、例えば、希少な野草について注意しながら下刈りをしたり保護することが必要だし、代表的な外来種であるニセアカシアやアメリカオニアザミを徹底して駆除することも多くの人々が納得してくれるだろう。さらには、セイヨウオオマルハナバチやアライグマなどにも関心を払うといったこともできると思う。

【看板類の整備について】

委員：大沢口に大きな看板が新設されたが、既に石造りの大きな看板がすぐ傍にある。必要性について疑問の声があることを知ってほしい。先般撤去された掲示板のあたりに移設はできないのか。目立つところに建てすぎである。また、参加団体がそれぞれ建てた看板はいずれ撤去されるのか。

事務局：参加団体が設置した看板については、少なくとも森づくり協定がある間は設置され続けると思うが、協定終了後についてはまだ明確な考えはない。

委員：野幌に限らず、国有林には看板が多すぎるという面はある。例えば、黒松内では看板のアーチをくぐって入山するようになっていて、悪い例として研修会などでも話をしてきた。最近ようやく一枚外したようだが、どの看板もそれぞれ経緯があって撤去するのは難しい面もあると聞く。

事務局：野幌が国有林であることを知らない利用者も多く、我々が作る看板については、どうしてもその点を強調したくなる。ただ、森林管理局から統一性をもった看板とするよう指示が下りてきていることもあり、公園行政とも連携しながら、すっきりとしたものを控えめにつくっていきたい。

委員：これまでも指摘してきたが、看板については、自然公園と自然休養林を一緒にして統一のとれたものとしてほしい。森づくり参加団体が建てている看板は、当初のものよりは穏やかになったが、野幌全体としてこのように植えているといった看板があるだけでよいのではないか。

【モニタリング調査について】

委員：大雪山での洞爺丸台風被害地の調査では、攪乱された土壌が50年経ってようやく戻ってきたように見える。モニタリングはこのくらいのオーダーで考える必要があり、結果を印刷物として残すことが大事である。また、モニタリング項目として、開花時期と結実状態の調査を加えることはできないか。

事務局：モニタリング調査は外部委託としていることもあり報告書は作成される。加えて、一般向けにわかりやすい配布物を作成していきたいとも考えている。

委員：モニタリングは結果を見るだけでなく、さらにその結果を踏まえて植え方や

扱い方をどうしていくべきか考えていくことが重要であり、いずれかの機会に議論してほしい。

委員：今後植生がうっ閉とともに、鳥類も変化が見られると思うので、取り組んではどうか。

【苗木の種子産地について】

委員：苗木の種子産地について報告があったが、トドマツについては遺伝的な性質について詳しく調べられてきた。例えば、北海道西部から東部に向かって耐凍性が強くなるとか、多雪地帯の枝は細くてしなやかであるが、雪の少ない所では枝の数が多くごついため、雪折れをおこしやすい。また、落ち葉などを腐らせる暗色雪腐病菌は、他の菌とは異なり深い雪の下で冬に活動するが、土壌が凍る雪の少ない場所では棲息できない。このため、雪の少ない地域のトドマツにはこの菌に対して抵抗性が弱いものが相当混ざっており、根室や釧路、十勝などの種を用いて多雪地帯で苗木をつくろうとすると、暗色雪腐病になり枯れてしまう等々がわかってきた。このため、昭和63年の北海道林木育種協議会において、トドマツは趣旨の産地と苗木の供給地域を定める申し合わせをし、これに従って今までやってきた。

このプロジェクトが始まる際に、トドマツ苗木の調達について森林管理局に聞いたところ、野幌の近くで確保できそうだという話があったのでこれまで特に話題にしてこなかったが、結果としては4割が運んできてはいけない上川管内の種子で育てた苗木が植えられた。これはおそらく、育苗に6年かかるトドマツ苗木が台風被害によって大量に必要なになったが、3年間ですべて植えるという計画の中では、区域内のみでは苗木調達ができなかった結果だろうと思っている。申し合わせ区域の外に苗木を持ち出すといろいろな問題が起きる可能性があるので、事務局で把握した種子産地の記録をしっかりと残し、今後の生育を把握してほしい。

事務局：先般の台風では石狩署と胆振東部署の管内だけで1万株もの風倒被害があり、苗木が足りない実態にある。復旧を急ぐことに視点を置くのか、急がないで遺伝的攪乱防止に重きを置くのか、おそらくその時その場所で意見は分かれると思うが、皆様のご指摘をうけてしっかりやっていきたい。

【その他】

委員：用紙の削減のため、資料は両面コピーを心がけてほしい。

(2) 委員長による議論のまとめ

植樹目標33haが最初の3年間で予定通り完了し、しかも多くの市民や民間団体が参加しながら郷土樹種31種が植栽された。今回植えたものがそのまま大きくなるわけではないが、時間の経過とともに落ち着くべき所に落ちつくだろう。再生活動は、プロジェクトのランドデザインに照らして、まずは順調に進んでいると評価できる。

苗木産地の問題については、短期間に苗木を準備しなければならなかったことから、トドマツ苗木については林木育種協議会の申し合わせから逸脱し、区域外から持ってきてしまった。しかし、近くに苗木がなかったという事情もあった。今後の生育などに問題が出るとすればそのとき今回の調査結果も考え合わせて検討していくことにな

るので、調査した産地情報をしっかりと記録に残してほしい。かつてアポイ岳の道有林にサクラを植えたところ、種子の産地が問題となって、すべて抜かざるをえなくなり、その後、あらためて近くで採取した種から育てた苗木を植えたことがあった。遺伝面からクレームがついたのはこれが初めてだったと記憶している。広葉樹はできるだけ近くでとった種を用いるという考え方にたっしてほしいし、トドマツはやはり協議会の申し合わせの範囲内で苗木を確保していくことが大事である。

植栽後は下刈りであるが、植えることには情熱を傾けても下刈りとなると熱が冷めてしまう面がやはりあるようだ。森を育てるには下刈りという行為が非常に重要なんだということをPRをして、市民参加で育てることをぜひ考えてほしい。

下刈りのあり方についても意見があった。天然稚樹をすべて刈ってしまうことは関係者の多くは考えていないようであったが、植え幅を大きくして天然更新を期待するというのが当初からの考え方でもあり、各団体や作業をする方々によく徹底してほしい。あわせて、森づくりというと樹木にしか関心が向かないことがあるが、野幌ではラン科などの貴重なものも見つかっており、これは守っていききたい。さらに、外来種のアメリカオニアザミは知床でも駆除に相当苦勞しており、野幌でも早い時期から取り組んでいくことが大事である。下刈りの際には、このようなことにあわせて取り組んでいくことはとても大事なことである。

モニタリング調査については、もっと長いスパンで取り組むべきとの意見もあり、現在の関係者はいずれ誰もいなくなるので、データをきっちりと印刷物にしておくことが必要である。また、開花・結実調査の提案もあったが、研究者を動員しなくても一般の人にもできるのでぜひ考えてほしい。

市民の参画については、これまで植樹作業を中心に市民の協力をいただいたが、これだけで終わるものではない。その観点から、植栽木のモニタリングへの市民参加や、クマゲラ調査などについて市民団体との連携を開始しているとのことであり、昨年までにはない新しい取組と言える。様々な調査に市民が参加することは、植栽といった作業以上に、野幌の森について市民自らが考える貴重な機会になると思う。そしてそのことは森林管理局の言うところの開かれた国有林や国民の森林を推し進める重要な鍵になりうるものであり、来年度以降もぜひ力を入れていただきたい。

ニセアカシアについては、徹底的に駆除するという指摘もあった。野幌はかつて林業試験場だったこともあり植林されたものは残していかなざるをえないが、どんどん広がっていく。皮を剥いで枯らしてもおそらく根萌芽が出てくる。野幌では薬剤を使うのも問題がある。明日、母樹を一部伐採する予定とのことであったが、その後も萌芽などを取り除くことが必要なのでしっかりやってほしい。

森林環境教育についても、ランドデザインに照らして見ると、大変によく努力をされている。さらに効率的にという点ではアンケートも一つの方法かもしれない。

以上、まとめるとこのようになると思うが、皆さんどうか。異論がないようなので以上をとりまとめとしたい。本日は、野幌プロジェクトについて有意義なレビューができた。来年度に向けて、より一層市民、道民、国民の森林として評価されるよう、事務局及び関係者の皆様にご努力をお願いしたい。

(文責：石狩地域森林環境保全ふれあいセンター)